

福井の戦国 歴史秘話

<第6号>

平成29年7月31日発行

徳川家康が信頼した「万端の用人」、本多富正！

加賀百万石の前田氏を抑える肝要の地、越前。関ヶ原の戦いの後、この地を治めたのは、**徳川家康の次男、結城秀康**でした。今回は、秀康を支えるため家康の肝入りで付家老として越前に入り、家中の万事を司った重臣として「万端の用人」（『当代記』）とまで称された本多富正を取り上げます。



本多富正像
(藤垣神社蔵)

本多富正は、元亀3（1572）年、三河国（愛知県）に生まれました。14歳の時より結城秀康（富正の2歳下）に仕え、九州島津征伐、小田原北条征伐など多くの戦いで功績を残します。そして、慶長6（1601）年、秀康の越前封入に伴い府中領主となりました（当時30歳）。富正は、現在の越前市役所（福井県越前市）の周辺に館（府中館）を構え、日野川の治水工事や町用水・道路の整備、館を中心としたまちづくりなど、優れた内政能力を発揮していきました。

慶長20（1615）年、戦国乱世の最後の戦い、大坂夏の陣が勃発します。徳川方として出陣した本多富正には、こんなエピソードが残っています。福井藩は、5月6日の戦いで徳川方の兵に加勢をせず、家康から“昼寝をしていたのか”と叱責されます。翌日、富正は、藩主忠直の気持ちを思い、討死する覚悟で、先陣の命を受けていた加賀藩に先駆けて、**真田幸村（信繁）**率いる軍勢に攻め入りました。見事、真田軍を撃破した富正は、大坂城内へ突入。塀を登り、“天下一番乗りは、越前の先手本多富正なり。敵も味方も確かに聞け。”と叫んだといひます（『本多家譜』）。そして、富正は長刀で敵兵を切り崩し、家臣に火をつけさせ、大坂城を落城へと追い込みました。

富正は、本丸一番乗りの証拠に、千鳥の屏風、千畳敷の大床張付の絵4枚を持ち帰りました（千鳥の屏風（県指定文化財）は現在、武生公会堂記念館に保管されています）。この“大坂城一番乗り”の偉勲を受け、幕府は、福井藩から独立して大名になることを勧めました。しかし、“自分は主君・秀康公に終生忠誠を尽くしたい”と断わったと言われています（『本多家譜』）。

本多富正が残した足跡の一つに、町絵師、俵屋宗達を抜擢し制作した「西行物語絵巻」（重要文化財、出光美術館蔵）があります。富正が依頼し、**烏丸光廣**（公家で、当代一流の文化人）が天皇所持の絵巻を借り出し制作の監修をした世紀の大企画でした。約10年余の年月と莫大な費用をかけた絵巻の制作。この大事業を烏丸光廣に依頼したのは、富正が仕えた結城秀康の未亡人、鶴子が烏丸光廣の妻となっていたからと言われています。ここにも、主君秀康公への忠義があったのかもしれませんが。

本多富正は、慶安2（1649）年、78歳で没するまで、忠直、忠昌、光通に至る4代の藩主に仕え、約半世紀にわたり、福井藩を支え続けました。富正が死去したとき、福井藩は、「国中、父母を失ったかの如し」であったと言われています。富正は、福井にとってまさに「万端の用人」だったので。

<参考資料> 武生市史、本多富正入府400年記念事業報告書

～戦国ふくい歴史紀行～ [龍泉寺]

・応安元年(1367)に通幻寂霊によって開かれた寺。府中領主であった本多家の菩提寺であり、富正以来歴代の領主とその家族が葬られています。

【住所】越前市深草1丁目10-3（JR武生駅より車で5分）



龍泉寺

★お知らせ 府中城跡の発掘調査で当時の石垣(約30メートル)が出土しました！

越前市の新庁舎建設に伴う発掘調査で発見。発掘調査中の府中城跡は、結城秀康の越前封入後、本多富正が拠点をおいた場所です。天守閣はなく、当時の町民からは「御茶屋」と呼び親しまれていました。発掘された石垣などの一部は調査や展示に使われる予定です。